佳作

百歳まで元気でいるために

石垣　亮子さん

「私、乳がん検診で引っかかっちゃった。」

きっかけは友人のこの一言だった。三十歳になったことだし一回受けてみようかと、何もないことを確かめるつもりで近所のクリニックで乳がん検診を受けた。もちろん自覚症状など無い。

少し緊張しながら初めてのマンモグラフィーと超音波検査を受け、待合室で雑誌を読んでいると、名前が呼ばれた。そのクリニックでは検査直後に結果を教えてもらえる。

「ちょっと気になるところがあるね。大学病院を紹介するから再検査を受けてね。」

何かの間違いだと思った。痛くもかゆくもないし、しこりもない。軽い気持ちで検査を受けに来たのに、精密検査なんて。三十分前までは、今日のランチは何にしようなんて考えていたのに、もう何も考えられなくなった。

実家の母に預けた息子を迎えに行く道中、悪い考えばかりが頭を巡った。何より心配したのは一歳になったばかりの息子のこと。入院や手術をすることになったら、そして万が一のことがあったら。職場復帰も控えていたため、仕事を続けられるかどうか不安にもなった。もちろん、医師からがんであると断定されたわけではないけれど、それでも可能性があるということだけで恐怖に震えた。

大学病院での再検査の日。クリニックから持たされた検査画像を見た医師から、精密検査の指示を受けた。少しの期待が打ち砕かれた気がした。

それから精密検査を受けるまで二週間。何をしても楽しいと思えなかった。何を食べても美味しいと思えなかった。味すら感じなくなるほどだった。夜、布団に入ってからは、横ですやすやと眠る息子の顔を見て涙が流れた。それまで大きな病気をしたこともなく、健康でいることがあたり前だと思っていた自分を情けなく思った。このとき病気というものを初めて身近に感じた。

精密検査は思っていたよりも大掛かりなものだった。なんだか手術を受けているようでとても緊張した。検査を担当してくれた技師の方々がとても優しく、怖がる私にずっと励ましの言葉をかけてくれたことを覚えている。

ついに検査結果を聞かされるときがきた。病院に向かう足取りは重く、冬の空気がいつも以上に冷たく感じた。検診を受ける前は、他人に対して少し冷たいところがあった私。その日は違った。ちょっと不愛想に感じたあの店員さんも、道

でぶつかったあのサラリーマンも、もしかしたら今の私のように大きな不安を抱えているかもしれない。周りが見えなくなるくらいの恐怖と戦っているかもしれない。そう思うと、周りの人に少しだけ優しくなれるような気がした。

結果は良性。全身の力が抜けていくのがわかった。最初に検診を受けてから約一か月が経っていた。長い長い一か月だった。健康でいられることがこんなにもありがたいことだと、三十年も生きてきてやっと知ることができた。病気かもしれないと思って過ごした期間はとてもつらいものだったけれど、乳がんについてよく知る良い機会にもなった。早期に発見できれば完治も難しくないこと、私の年代でも罹患している人がたくさんいること。乳がんに限らず、これからは定期的に検診を受けて、もっと自分の体を大切にしようと心に決めた。

私が乳がん検診を受けるきっかけになった友人も、結果は良性だった。翌年の年賀状では、お互い「健康で楽しい一年にしよう」と書いた。そんな決まりきった台詞がこんなにも大切に感じたのは初めてだった。人生百年時代。これからも定期的に検診を受けて、百歳になるまで元気で年賀状のやりとりをしようと、友人と約束した。